

鳥取県青少年育成アドバイザー協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信40号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日 2004. 9. 25
編集 芳村恵子
〒680-0002 鳥取市浜坂東1-10-15

中四国青少年育成アドバイザー 連合会総会 参加報告

江府町 井上 廉女

平成16年度中国四国ブロック青少年育成アドバイザー連合会の総会及び研修会が、平成16年5月30日、岡山市のNTTクレドビル17階にある岡山県男女共同参画推進センターで開かれ、山本会長、西浦副会長とともに出席しました。10名程度参加の岡山県以外は、広島県を除く各県より2、3名程度、全体で30名弱の出席者でした。

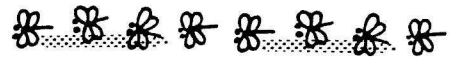
会長、来賓あいさつの後、愛媛県の田中会長を議長に15年度の報告・決算、16年度の計画・予算案承認の後、来年度以降の大会開催予定県の確認、島根県・山崎さんより本年10月に研究集会を開催される島根大会の案内と参加要請、玉置事務局長より各県役員・理事の新旧交代の紹介等がありました。

引き続き研修会に移り、「青少年育成の手掛かりを求めて」と題し岡山県の高野佳郎先生の講演が行われました。ご専門の立場から、青少年育成の切り口として「脳を科学する」ことによる分析と今後の手だてについての内容は斬新で、誠実なお人柄が伝わる語り口に思わず皆聞き入ってしまいました。すべての命は43億年前よりずっとつながっていること、脳幹に情報が行くためには子ども時代に自然の中での体験が最も必要であることが科学的な立場からも立証される等、興味深く聞かせていただきました。



先生みずからチェンソーを駆使してつくられたという癒しをもたらす「ヒノキチップの袋詰め」も出席者全員へおみやげとしてプレゼントされました。

終了後1時間余り、青少年を取り巻く鳥取県内の状況について出席の三人でいろいろ話せたのも収穫でした。

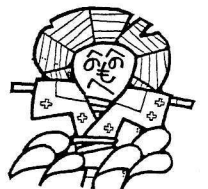


あすを拓く若者たち

江府町 井上 廉女

豊かな自然のふところに抱かれながら、静かな時の流れのなかで里山はことしも実りの季節を迎えました。

鳥取県では昨年度から、定職についていない若者の就業意識を高めようと、1人月5万円の支援金を出して若者が農作業やボランティア活動をする「若者地域づくり支援事業」に取り組んでいます。ことしは岩美自然学校、NPO未来、日野ボランティア・ネットワーク（ひのぼらねっと）の東・中・西の3カ所が事業委託を受けてすすめています。



今、全国どこでも農業の抱える現実は厳しく、減反政策、農業者の高齢化、後継者不足による耕作放棄地がいたるところに見られます。日野では、元気邑近くの耕作放棄地75アールを中心に、アドバイザーや地元農業者の指導のもと、3人の若者たちが草を刈り、耕運してソバの種をまきました。これから収穫し、そば打ちまでを行います。畑で自給用の野菜もつくっています。農作業を通して農業の厳しさや魅力を体験するとともに、意欲を高めながら新たな就業をめざしていますが、単なる就職あっせんや職業訓練にとどまらず、生き抜く力や自信をつけていく場となっています。通常のボランティア活動にも参加し、地域の人の役に立って喜んでもらっています。

裏面に続く

4カ月の間ずっと炎天下の作業も休まず通い続けてきている若者たちは、体調がよくなったり、農業は楽しいという言葉が出るなど意欲的で、皆少しずつ確実に変わってきました。

私も日野のスタッフとして少しばかりお手伝いするうち、農と食の大切さと奥深さに改めて気がつきました。大地と水は命をはぐくむ力の源です。土にふれて心もだんだんほぐれてきます。たとえ作業は厳しくても、大自然を相手に、仲間がいて、ふれあいとぬくもり、思いやりの心に包まれて生きていくことの大切さを実感しているところです。

広大な草ぼうぼうの荒れ放題だった土地は今、白いソバの花が満開です。

「子どもは7歳まで神の子ですから大事に育ててくださいね」

芳村恵子

8月吉日、3人目の孫のお宮参りに近くの神社に出かけました。どんどこどんどこ、心地よい太鼓の音とともに神主さんに祝詞をあげて頂きました。

その後、孫を抱いて下さって、「子どもは7歳まで神の子ですから大事に育ててくださいね」とおっしゃったのです。

最近殺伐とした事件も多い中、「えっ？」てゆっくりお話をお伺いしたくなりました。

大事な大事ないのちについて、秋の澄んだ青空のような気持ちで読んでいただければと、通信のための原稿として書いていただきました。



『赤ちゃん誕生への祈り』

日本の国では昔から赤ちゃんへの祈りが節目節目に行なわれてきた。簡単に記すと、子

授けの祈りからはじまり、着帯祝い（安産祈願）、そして誕生より出産の祝い（安産御礼祈願）→お七夜の祝い（命名祈願）
→初宮詣（お宮参り）
→お食い初め
→初誕生日の祝い
→初節句の祝い（成育祈願）
→七五三の祝いと続く。

このように、赤ちゃんに関わる祈りは子を宿してより数年の間に、これだけ多くの人生儀礼を行なわなくてはならない。これはひとえに、悠久より赤ちゃん誕生への想いが今のそれと何ら変わらない事を表している。それはまた赤ちゃんとその両親だけの行事でなく、家族親戚またご近所地域みんなで祝ったもので、現代以上に命の誕生を大切にし、その一つ一つが人間のなせる技ではない神業（かみわざ）であることから、赤ちゃんは「神様からの授かりもの＝神の子＝神様」としてみんなでお祝いし、七五三詣の歳を迎えて初めてこの現世の人間として教育し、社会秩序を教えるのである。



「乳児・幼児は神様」なのだから、幼き折は「我が子」でなく、「神様からのお預かりもの」として神社等で祈願してもらい、そして神様と小さな神様（赤ちゃん）に感謝するのが最も重要なことであり、それはまたみんな大切に育てますという決意表明であり、新しい仲間として皆に認知してもらおう機会でもあった。更に昔は、丈夫に育てることは大変なことであり、生存が危うい幼児がしっかりとした児童に成長していくために様々な祈りが営まれてきたのである。

以上のように、出産や子育てはその時々を経験知識の中で、ベストを尽くしていただろうし、そのほかの事と比べて特に真剣慎重であったことだろう。

「子は鎚」「親思う心にまさる親心」「子を持って知る親の恩」など、親子にまつわることわざが多いことをみればよくわかる。

次のページへ続く

次に紹介する文は鳥取で発見された江戸時代後期の古文書であるが、文中五行目から九行目に

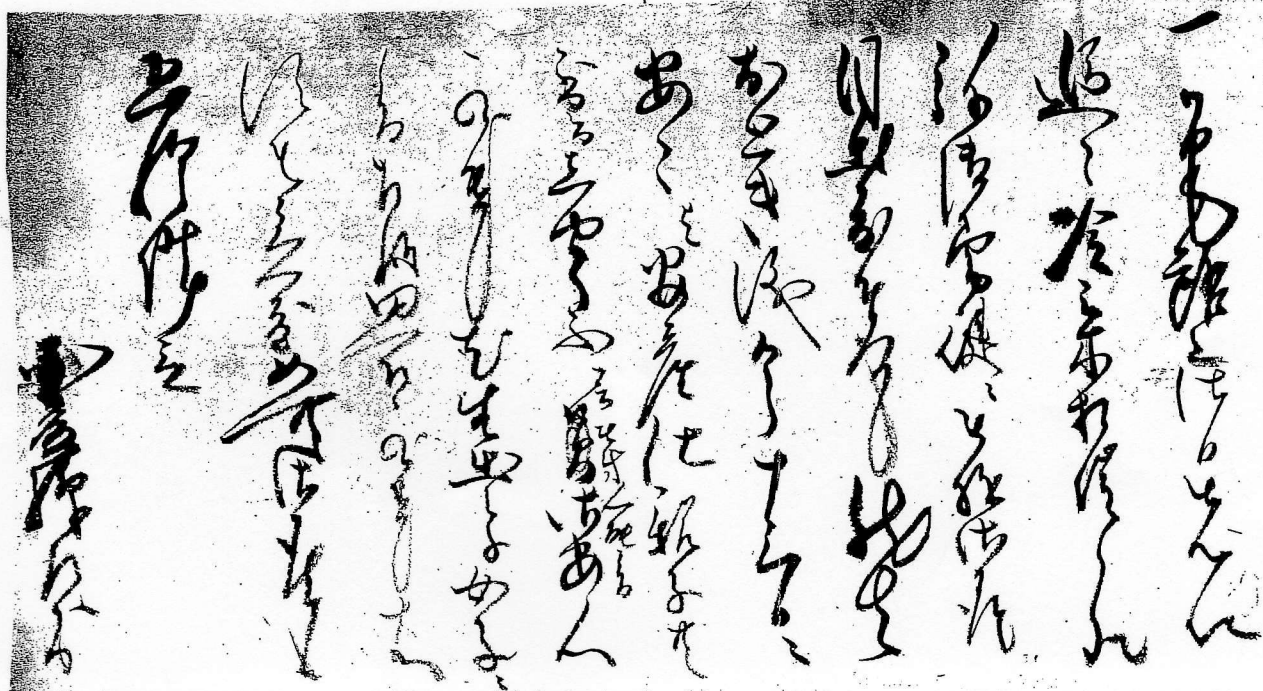
「おとき儀 今日十三日に
安々と安産 仕（つがまつり）親子とも
至って志やうふ（丈夫）にて候間
（そうろうあいだ）
御安心 可被遣候（つかわされるべく）
（ご安心して下さい）
尤も出生の子 女子に
候間 左様思召（おぼしめし）可被遣候」

つまり国藤孫左衛門さんが、孫の誕生と母子共元気で、生まれた孫は女の子であった旨を親類縁者に知らせた手紙である。

不安定な世上や物のない不自由な時代であっても子どもや孫へのいたわりや慈しみの心を読み取ることができ、今私たちが忘れかけている人としての心の温もりが伝わってくるほのぼのとした古文書である。

私も生後数ヶ月の乳児をもつ新米父さんの身ではあるが、最近感じるのは、人間関係が希薄になったといわれる昨今において、見ず知らずの方から声を掛けられる機会が大変増えたことだ。「何ヶ月？」「お顔を見せて」「お父さんにそっくり」などなど。時には、子育ての極意や助言さえされる。こういった、他人さえ引きつけるオーラを小さな神様はお持ちなのだ。

いつの時代もこれからも、赤ちゃんは大切なかわいい神様なのだ。



編集後記

長い長い夏も終わり、朝晩肌寒ささえ感じるようになりました。雨上がりの空に、綺麗な月が輝いています。

秋と言えば学びの季節でもあります。学会や研修の開催の知らせがあちこちから届きます。頭脳の活性化や心を豊かにするためにも、刺激を受けにでかけたいと思います。

次回は12月発行予定です。原稿お待ちしております。宜しく願いいたします。

* 七五三詣

本来十一月十五日に三歳の男女児・五歳の男児・七歳の女児が神社に参拝し、健やかなる成長を祈願する。

* 数え年

生まれた年を一歳とし、以後正月になると一歳を加えて数える年齢。つまり、お母さんのお腹に命が誕生した瞬間から歳を数えるので、生まれたときは一歳なのだと感じるとよいのでは。